

[社 会]

**地域体験学習で、学ぶ意欲を高め、地域を愛する心を
育てるための手立て**

- 小学校4 学年 「松木直松と釜沢用水」 -

植木 靖英*

1 主題設定の理由

現行学習指導要領では、小学校中学年の主題は、「地域社会の学習」となり、「地域の実態や児童の興味・関心等に
応じた指導が一層充実する¹⁾」ことが目標とされている。その点は新学習指導要領においても変わらない²⁾。地域学
習の目標としては、社会認識を通して「公民的資質の基礎を養う」ことが小学校社会科の究極目標になる。山口幸男
は「単に客観的・事実に社会を認識するだけでは社会科の最終目標に到達できない。客観的・事実に加えて、
心情的・態度的側面を取り入れることによって、社会科教育の目標に達するのである³⁾。」と言っている。ここでい
う心情的・態度的側面とは郷土の発展に貢献しようとする態度の育成をも含んでいる。櫻井謙一は「地域社会に対す
る誇り・愛情など態度面に関わる記述は年を追って増えつつあるものの、現行指導要領下でも全体の半数にも満たな
い」「地域社会に対する誇り・愛情にいたる流れを形成した学習が求められる⁴⁾」と警笛を鳴らす。

近年、地域の素材を活用した事例が発表されている。中学年を扱った池田岳康と西塚智行の実践を見ると、池田は
スーパーマーケットを題材にし、社会的思考力・判断力を育てるためには、体験で得た情報を整理・比較・検討・交
流という過程が大切であると説いた⁵⁾。西塚は地域の清掃工場を題材にし、社会的思考力を高めるためにノートを整
理・比較・統合することの大切さを説いた⁶⁾。

公民的資質を養うためには、当然社会的な思考力・判断力を育てることが必要ではあるが、さらに地域社会の一員
として地域を担い発展させていこうとする自覚や態度を持つことができるようにしたいと考えた。

中教審では言葉と体験の重要性を指摘した。言葉は「他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための手段で
あり、家族、友だち、学校、社会と子どもをつなぐ役割」をもつもの、体験は「体を育て心を育てる源」とされ⁷⁾、
別々のものとして扱われている。しかし社会科では、一つの社会的事象を二つの方向での分かり方として位置付ける
べきである。現地調査という体験で理解するものも、地図という言葉で理解するものも、同じ場所を理解することに
つながるからである。

私は、地域素材を教材化し、それを直接体験に結び付け、社会的な思考力・判断力を育てたいと考える。さらに山
口・櫻井のいう態度面を育成し、地域を愛する心を持たせたいと考え、本研究を行った。

本研究は、地域の開発に関する学習単元において、校区内にある用水路の開発事例を取り上げて教育内容を設定し
たものである。先人の苦労をしっかりと理解するためには効果的な調査体験学習の位置付けや地図の活用（土地の高
低を知る等高線の学習）、地域の人々の生活の移り変わりなどの思考・判断が大切になってくるのではないかと考え
る。

先人の苦労を理解するという客観的・事実に認識にとどまらず、地域を大切にしよう、水や用水路を大切にしよう
とする心情まで養いたい。

2 研究仮説

本研究では、育てたい子どもの姿、そしてその子ども像に近づくための過程を次のように考え、追求する。

地域の開発に関する学習単元において、効果的な地域の調査体験学習、地図の活用などの過程を通して、子
どもたちの社会的な思考力・判断力を育てるとともに、地域社会に対する誇り・愛情をもった子どもたちを育てる
ことができる。

* 糸魚川市立西海小学校

3 研究の方法

本研究は、公立小学校の4学年16名に対して、平成20年6月に筆者が行った実践授業をもとに検証をする。小単元『山ろくに広がる用水』計13時間のうち、「用水はどのようにつくられたのか」(2時間)、「用水をたどろう」(4時間)、釜沢用水について考えよう(1時間)に焦点を当てる。水が貴重なものであったということ、用水路を引く体験から実感させられるのか。用水路の取水口やため池、点検路、川の水量などを見ることによって、先人の苦勞を知ることができるのか。そして先人が築いた用水路を多角的に考えることは、思考力・判断力を高めることにつながるのか。さらに深い社会認識を持ち、地域社会に対する誇り・愛情をもつことができるのかを探る。

4 構想の視点

(1) 児童と地域の特徴

児童は、3年生で学校の周りの様子や市の中心部にある商店街や大型店舗等について学習してきている。しかし、現在のような市が突然できあがったわけではなく、数々の先人の働きや苦心があったからこそであることまではなかなか理解していない。過去の生活における人々の願いや協力、地域の発展に尽くした先人について学習し、人々の生き方に触れ、地域社会に対する誇りと愛情を育てていきたいと考える。

糸魚川市西海地区は市の中央部に位置し、学校は周りに水田が広がり、万石用水が流れ、駒ヶ岳や千丈ヶ岳を望む豊かな自然と景観につつまれている。万石用水は地区内で網の目のように枝分かれしながら、勢いよく流れている。身近なものとして感じている反面、低学年児童は用水イコール危ないところという意識をもっている。総合的な学習の時間には、田畑に利用されていることを学び、昔は用水の水を洗濯などに利用していたと思われる跡(段差)も多々発見し、用水が生活に密着していたことも認識している。

社会科の本単元の構成にあたっては、地区を流れる3つの用水(万石用水、釜沢用水、七ヶ村用水)が現在の西海小、糸魚川東小、大和川小学区の米作りに欠かせない用水となっていることを取り上げる。いずれも二級河川である海川を取水口としているが、釜沢用水は夏季のみに限定し取水が許されている。この釜沢用水を中心に本研究を進めた。

釜沢用水は明治40年、水利権の問題を解決するために山肌をぬって作られた山腹用水である。春はトウスル川や不動川の雪解け水で不足することはないが、夏季は水不足になることから、さらに上流にある標高400mほどのところにある水量の多い海川から取水する必要がある。その水利権の問題を解決し、水を確保できるようにしたのが地区内出身者の松木直松という人である。それまで新田開発は何度も計画されていたが、水が確保できないことから計画が取りやめになっていただけに、水路確保と水利権は念願であった。地区の用水組合の方の話によると水田面積は40町歩から80町歩にまで拡大し、村の生活はずいぶんと楽になったという。現在に至るまでの間に、全長7kmほどある山腹水路は地滑り等で修理が必要になったが、地区の方が毎日輪番で行う点検補修作業や市・県の大規模補修作業のおかげで地中にパイプを埋め込みそこに用水を通せるようになっている。

(2) 社会的な思考力・判断力を育てる

昔の人々のくらしの様子や地域の生活を向上するために努力した地区の先人松木直松の働きを、聞き取りや見学を通して具体的に調べるようにする。効果的な体験活動にするには、釜沢用水の取水口やそのもととなる川の水量に着目した調査活動がポイントになると考える。この実践は6月に行ったが、山にはまだ残雪が残っている。海川の水量が夏になっても豊富な理由は実際に水の冷たさを感じたり、残雪を見たりすることによって理解できるはずである。等高図を活用することによって、どうして取水口をより山奥の標高の高いところに求めたかについても理解できる。その際、米のとれ高や生活の変化などは資料をもとにして調べ、絵カードにまとめたり、年表に整理したりして、児童自ら用水ができる前後のくらしの違いを理解できるようにするとともに、当時の人々の願いや思いについて考えられるようにする。松木直松の働きを多面的に話し合い、社会的な思考力・判断力を育てる。

(3) 地域社会に対する誇り・愛情といった心情を育てる

水が不足すると作物を育てるのが大変なことは分かっているが、どのくらい大変なのかということは見学や資料からは実感できない。まして学校の周りに勢いよく用水が流れていれば用水の大切さはなかなか実感できない。そこで明治時代にあった道具で水路を確保した経験を実際に体験することで、苦勞を実感させたいと考える。山間地と学校の敷地内では明らかに土質が違うが、1m四方の土を実際に掘り、運ぶ重労働な体験を通して、当時の苦勞と思いを味わわせたい。本実践の根幹には「どうしても水がほしい」「水は貴重なもの」という当時の心情がある。米作

りが生活の中心であった当時は水がかげがえのないもので、そこに松木直松が発起した背景がある。

平成に入り、日々用水路点検をするために岩を砕き、草を刈り点検路が設けられた。そしてたとえ地滑りなどがあっても1滴も残さず用水を下流に流したいという住民の願いから、7kmもの用水路が地中のパイプの中に埋め込まれた。明治から現在まで続く地区・市・県一体になっての取り組みに、子どもたちは熱いものを感じるはずである。県・市・用水組合のそれぞれの方から話を聞き、実際にその様子を見ることによって、水の大切さを、地域に対する誇りと愛情を持たせることができると考える。

5 実践の概要及び分析

(1) 単元の目標

- ・地域の開発に力をつくした先人の働きに関心を持ち、進んで調べようとする。(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・人々の願いや苦労の様子を具体的にとらえ、用水ができる前後の暮らしを比べ、地域の発展について考えることができるようにする。(社会的な思考・判断)
- ・今と昔の水田の比較、年表や地図の活用から、土地の様子を発見したり、実際に見学をしたりし様子をまとめることができるようにする。(観察・資料活用の技能・表現)
- ・地域の発展に尽くした先人の苦労や努力を理解することができるようにする。(社会的事象についての知識・理解)

(2) 小単元の指導計画(山ろくに広がる用水(全13時間))

おもな学習活動と内容	☆留意事項 ◎評価の観点
○西海地区を流れる用水は(1時間) 万石用水以外にも七ヶ村用水、釜沢用水があることに気付く。	☆地図だけでなく、旧南西海学区を流れる用水の写真を見せ、様子をイメージできるようにする。 ◎2つの用水に関心をもっているか。(関意態)
○用水はどのようにつくられたのか(2時間) くわやもっこ、つるはしなどの昔の道具を使って用水路を掘り進められたことを、体験から重労働であることを実感する。	☆用水幅1m、深さ1mをくわで掘らせ、用水路を引く苦労を実感できるようにする。 ☆水不足の時の写真や資料を用意する。 ◎当時の人の思いや苦労・工夫などを考えているか。(思判)
○3つの用水はどこを流れているのか(2時間) 等高線による土地の高低の見方を学ぶ。 3つの用水の流れ方を調べる。(特に釜沢用水の流れ方)	☆用水路を流れる向きを学習するために、等高線による土地の高低の見方を教える。 ◎等高線から土地の高低を読み取り、用水の流れ方を調べることができるか。(技表)
○用水をたどろう(4時間) 用水の観察や聞き取りを通して、昔の人がどのような気持ちで、どのような苦労や工夫をしながら用水路をつくったのかをカードにメモする。	☆事前に調べる課題を立てる。 ☆3つの用水の取水口、貯水池など、山間地を流れる様子も見学する。 ◎めあてをもって、当時の人の思いや苦労・工夫などを考えているか。(思判)
○分かったことをまとめよう(2時間) 見学のメモをもとに、分かったことや感想を新聞にまとめる。	☆全員が同じ内容の新聞になることが予想されるので、事前に考えた課題や友だちや先生方に知ってほしいことを中心にまとめる。 ◎用水の様子をまとめられているか。(技表)
○釜沢用水について考えよう(1時間) 松木直松さんはどうして海川から水を引いたのかそのわけを考える。	☆教科書や掲示資料を参考にして、自分の考えをカードに記入できるようにする。 ◎広い地域の人の願いがあって、釜沢用水ができたことを理解できているか。(知理)
○用水が完成して(1時間) 用水が開発されて、人の暮らしがどのように変わったかをまとめる。	☆副読本『のびゆく糸魚川』や資料をもとに、人の暮らしの変化をまとめる。 ◎用水がつけられたことによる暮らしの変化について、まとめられているか。(知理)

(3) 実践の分析

① 用水路を掘る苦労を実感する場の設定

単元導入において、用水路の写真を見て、子どもたちは3つの用水とともに、コンクリートブロックの中を水が流れていることに気付いた。

しかし資料によると現在のようにきれいに整備されたのは昭和に入ってからということが分かり、それまでの用水路はどんな様子だったのだろうと関心を持った。

そこで2時間目には、当時のはしやくわで土を掘り、もっこりという道具で土を運んでいたことを知らせ、実際に体験する場を設定した。

場所は畑の隅を確保した。果たして子どもたちは意欲的に掘ったにもかかわらず、約30分間で深さ45cmしか掘れなかった。「もう1時間掘りたい」「1m掘るまでがんばる」と口々に言うので、次時も挑戦することにした。

大変なことが起きた。雨が降り、次時体験するときには穴は水でいっぱいになっていた。しかしある子が「昔も雨が降って作業が大変だったことがあるに違いない」ということに気づき、あえて土掘りを決行した。しかしこの日は10cmしか新たに掘ることができず、2日間合わせても深さは55cm。ここで断念した。非力とはいえ、クラスみんなで掘り進めてもこれだけしか掘ることができず、いかに重労働かを実感した。またこんな苦労をしてまで用水を確保したかったという当時の人々の思いを知った。

歴史的内容が中心となる今単元では、体験的な調査が難しい面が多い。しかし工夫することにより、いろいろな調査や体験を行うことができると感じた。もっこのように手に入りづらい道具は資料により道具の様子を確認するだけにとどめ、つるはしも予想外に重かったので、安全のために使用しなかった。くわやバケツなど普段使い慣れた道具を使い、自分たちの力だけで掘った体験は、苦労を実感することに効果があったと考える。

② 効果的な調査活動

市の農業振興課に釜沢用水を見学したい旨を相談したところ、用水組合・地域振興局・そして市の担当の方計10名もの方々が案内や説明に入っていたことになる。

見学では、取水口や貯水池などを見て回った。釜沢用水の取水口は3ヶ所あり、時期によって取水口を変えている。その中で最も奥にある海川の取水口からは夏季限定で取水が許されている。中・下流には別の用水の取水口があるからである。この海川の取水口見学が効果的だった。

バスの乗り入れが不可能な道のため、2kmほど山を登った。標高400mほどのところであるが、かなりの急勾配で4年生の児童にはきつかった。この道は以前からあったわけではなく、大和川地区と真光寺地区そして県、市が協力して用水点検を目的に作った道であった。しかも大和川と真光寺の用水組合の人は1日おきにここを歩き、点検に来るといふ。大変な思いをしてまで用水路の異常がないかを点検していることに、子どもたちは改めて水への思いを知った。また途中大きな岩がいくつかあり、ダイナマイトを仕掛けたあとがたくさん残っていた。道を通すためにダイナマイトを使っていたことに驚いた。点検路への熱い思いを知った。

その海川の取水口から5km程下りたところに分水マスがある。ここで大和川と真光寺に行く用水を分けている。昔はここで、自分たちの地区に水が多く流れるよう相手のマスに石を置きせき止めるなど水の取り合いによる争いが絶えなかったという。鎌や斧を持って争ったことがあるという。すぐ近くには監視小屋や貯水池などがあり、人々の水を守る工夫を見学した。貯水池は約50m四方もあり、深さは7m。1粒でも多くの収穫を得るために水をどうにかして確保しようとする思いと苦労を知った。

③ 先人松木直松の思いを探る話し合い活動

前時子どもたちは調査活動をしてわかったことや感想を新聞にまとめている。トウスル川の取水口に入り、水の冷



【用水路掘り体験】



【ダイナマイトを使って岩を砕いたあと】

たさを肌で実感した児童やもう6月だというのに海川の上流にある大雪溪に感動した児童などがいた。一人ひとりが見たり、聞いたり感じたりしたことを自分の言葉で新聞にまとめた。本時は体験で得た事実認識をさらに深い社会認識にするために先人の思いを探る話し合い活動を位置付けた。これまでの歴史的・地理的な学習から考えると、『松木直松さんはどうして海川から水を引こうと考えたのか』の発問に対し、川の水量・田の拡大・当時の生活の様子の3観点からの意見が予想された。

○ 川の水量に関する意見

C 1：山から用水をとる人が少なかったから。

C 2：海川の方が水の量が多いから。

T：不動川やトウスル川では水が足りないのかな？

C 3：海川にはまだ雪があったから雪解け水で多いと思います。

C 4：水がきれいだから。

T：（山の方ではなく）海川のもっと近いところから取水すれば楽じゃないの？

C 5：（下流の）ほかの地区が困らないようにしたから。

T：地区での話し合いで水の約束事があったのかもしれないね。

といった意見があがった。C 2、C 3の意見は体験が生きた意見である。

川幅や雪溪を実際に見て水量を認識できていた証である。

○ 地理的な面に関しての意見

C 6：高いところの方が水が流れやすいから。

せっかくの意見であったが、本時では時間が足りなくなってしまうことが予想されたので次時等高図でしっかりと確認することを約束した。ポンプがない時代には、水は高いところから低いところへ通すしか方法がなく、7 kmにも及ぶ水路を標高400 mから200 mに勾配を考え、慎重に通していたのだらうと思いを馳せ、苦労を知った。

本時は田の拡大に関する意見がすぐに出なかったため、補助発問をした。

○ 田の拡大に関する意見

T：何のために水が必要なんですか？

C 7：田にあげるため。

C 8：稲を育てるため。

C 9：田を広げたいため。

ここで、資料をもとに、水田面積は40町歩から80町歩にまで拡大したこと、1町歩からとれる米の量を説明した（当時は1町歩から2400 kgの米がとれた）。そして当時どんなに貧しい生活をしていたかについて市史や絵資料などから説明した。すると、子どもの中から、

○ 生活に関する意見

C 10：生きるため・・・。

C 11：米が食べられないと村人はみんな死んでしまう。

という意見があがった。そしてある子が意見をまとめた。

C 12：生活が大変なので、田んぼを広げるために、水量の多い海川から水を引こうと考えた。

最後に、真光寺地区だけでなく、大和川地区、釜沢地区も同じ思いで用水を引きたいと思っていたことを確認し本時を終了した。



【2つの地区に水を分け分水マス】

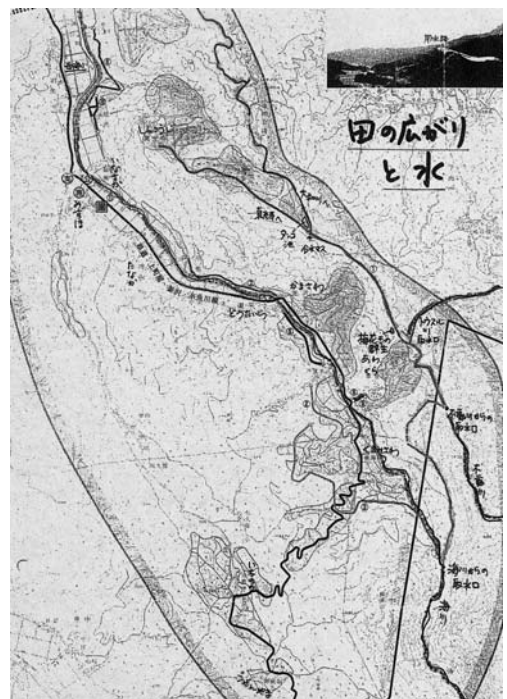
松木直松さんはどうして海川から水を引こうと考えたのでしょうか。



○ 今日の学習の感想・分かったこと

まづはおまつさんはいけるために海から水を引こうとしたということがあがってきた。

【松木直松の思いを探る話し合い活動】



【土地の高さ】

この地図は国土地理院の承認を得て、同院発行の地形図を複製したものである。

今は主食がご飯だったり、麺だったり、パンだったり、またそれらを加工し様々なものを食べたりすることができ
る時代である。そんな今を生きる子どもたちが、100年前の米中心であった生活の様子を考えることはとても難しい。
しかし松木直松の願いや思いを考える上で、歴史的背景を知ることは欠かせないことである。一家が協力して米作り
をする様子や冬でも来年に備えて縄ない、俵編みなどをして過ごしていることなどを資料から読みとれたことは大変
意義があった。

6 考察

用水路掘り体験と調査体験学習により、先人の苦労や思いを実感し、思いを馳せる姿があった。話し合い活動では、
調査体験学習が生き、社会認識を深めることができた。まさに地域素材を教材化し、それを体験や地図の活用などの
過程を通し、社会的な思考力・判断力を育てることができたと考える。しかし地域社会に対する誇り・愛情は育成で
きたか。本単元後のアンケートでは、Q. 西海地区は好きか? に対し、16名中15名が「とても好き」1名が「好き」
と答えている。単元前は、16名中12名が「とても好き」4名が「好き」と答えているので、微増である。しかし統計
的に人数が少ないことから実証はできない。

本単元では、多くの方にお世話になった。市の農業振興課、県の地域振興課農林振興部、大和川・真光寺・釜沢地
区の用水組合の方々から説明やお話をいただいた。現在になっても、地区・市・県が一体になって米作りに対応して
いる姿に、子どもたちは何か熱いものを感じたはずである。

今糸魚川市では、田が少しずつ減っている。米の消費低迷による減反や生産者の高齢化などによる。しかし昔も今
も米作りに情熱を持って携わっている人を知り、その姿に誇りを感じてほしいと思う。将来にわたって自らも用水路
を、田を、そして地域を、大切にしようとする人に育ってほしいと願っている。

注

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 社会編』 文部科学省, 1999 pp. 3 - 14
- 2) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 文部科学省, 2008 p.34
- 3) 山口幸男 「新学習指導要領地理教育の基本的性格」 山口幸男著 『社会科地理教育論』 古今書院, 2002, p.59
- 4) 櫻井謙一 「小学校社会科における地域学習の改善に関する研究」 『上越社会研究』 20 上越教育大学社会科教
育学会 2005, p.46
- 5) 池田岳康 「社会的思考力を育成する社会科指導の展開」 『教育実践研究』 16 上越教育大学学校教育センター
2006, p.41
- 6) 西塚智行 「社会的思考力を高める指導の工夫」 『教育実践研究』 17 上越教育大学学校教育センター 2006,
pp.31 - 36
- 7) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 「審議経過報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401/003.htm 2006, p.13, 2008年12月22日
検索

参考文献

- 糸魚川市教育委員会 社会科副読本『のびゆく糸魚川』, 2006
- 新潟県糸魚川農地事務所 中山間地域総合整備事業「西海地区計画概要図」, 2002
- 井澤一雄 『開田を潤してきた釜沢用水』, 私家版 (糸魚川市大和川坂井にお住まいの小林芳文さんの曾祖父の日記
をもとにまとめたもの)
- 糸魚川市 『糸魚川市史・資料集』, 1986